

詩篇
使徒行伝

第119篇 97節～100節
第6章 1節～7節

説教 本庄侑子牧師

教会が成長していく中、教会内部で、あるもめ事が生じました。「ギリシヤ語を使うユダヤ人」から、「ヘブル語を使うユダヤ人」に対して、自分たちのやもめらが、日々の配給でおろそかにされがちだと苦情が出たのです。

「ギリシヤ語を使うユダヤ人」は、イスラエルの地を離れて外国に移り住み、新しい文化や思想に触れ、世界共通語だったギリシヤ語を使うようになった人々です。「ヘブル語を使うユダヤ人」は、イスラエルの地に住み続け、イスラエルの言葉であるヘブル語(正確にはアラム語)を使い続けてきた人々です。彼らはユダヤ人としての習慣を守り、律法を大切にしていました。

その中で、今回の苦情が出てきました。それまで配給は、使徒たちが行っていたようですが、人数が多くなり、不公平が生まれてしまったのかもしれない。一方で、最初の教会で中心的な働きをしていた人は皆、ヘブル語を使うユダヤ人でした。ギリシヤ語を使うユダヤ人の中には、そのような教会の体制に不満を持つ人たちがいたかもしれません。最初の教会に生じたもめ事の背後に、二つのグループの緊張関係が潜んでいたように思います。

この時、使徒たちは苦情そのものよりも、自分たちが「神の言をさしおいている」(2節)ことを問題にしました。このような時こそ、教会全体が神の言葉に集中しなければならない。また、神の言葉を語るために召された自分たちが、その本来の務めに集中しなければならない。そう気づいたのです。

「わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に当ることにしよう。」(4節)使徒たちの提案に会衆一同が賛成しました。教会全体が、礼拝に集い、御言葉を聞くこと、そして、まだ福音を聞いたことがない人たちのところに使徒たちを遣わして御言葉が語られることを、最も大切にしていこうと願ったのです。

そうして、これまで使徒たちが担ってきた配給の奉仕を「御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち」(3節)7人に任せることにしました。選ばれた全員がギリシヤ語を使うユダヤ人だったようです。苦情の解決だけを考えるなら賢い解決策ではなかったでしょう。しかし、教会は全員でギリシヤ語を使うユダヤ人7名を選び出し、これを良しとしました。

この時、使徒たちが提案した奉仕者の基準は「御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち」でした。様々なことについて、御言葉に基づいた信仰的な判断が出来る人のことです。また、その人自身が礼拝を重んじており、人格や生活を通して御言葉が証されている人のことです。

彼らは、自分たちの意見を代弁してくれる人や、能力や経験豊かな人を選んだのではありませんでした。あくまでも、その人自身が御言葉に聞く人であることを重んじたのです。そうして選ばれた7人。ふたを開けてみれば、全員ギリシヤ語を使うユダヤ人でした。そして、そのことに、もはや苦情は出なかった。神の御心と受け止めたのです。

教会が直面した新しい状況の中で、教会は新しくなりました。そうして福音がより力強く、より多くの人々に届くようになりました。そのような中、奉仕者として選ばれたステパノが配給の業を担っただけではなく、伝道していったことが伝えられます。新たな奉仕者が立てられ、教会が御言葉に養われ、配給の業が充実したことによって、教会に連なる一人一人が御言葉を宣べ伝える力をこそ、与えられていったのです。

「こうして神の言は、ますますひろまり、エルサレムにおける弟子の数が、非常にふえていき、祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった。」(7節)もめ事を通して、神は教会の最も大切な務めに教会全体の目を開かせ、体制を新しくさせ、連なる一人一人を主の弟子として立ち上がらせ、御業を拡大されました。

この後、福音はユダヤ人社会を越えて、異邦人社会に伝えられていきます。7人の奉仕者たちがギリシヤ語を使うユダヤ人たちだったことは、後に重大な意味を持って教会の働きを支え、進めることとなったでしょう。後の時代、教会は神への畏れを抱いて振り返ったことでしょう。あれは、私たちの思いを超えた天の選び、天の配剤だったのだ、と。

神はもめ事の中でも、ご自身の福音を教会に宣べ伝えさせるため、新しく人を立て、務めを与え、これからのご計画と結びつけてくださいます。私たちは、そのような方に出会っていただき、そのような方に用いられるために、今日も一つとされて、ここにいるのです。

(記 本庄侑子)